法華経に見る共生の思想

川田洋一

本日のシンポジウムに、このように多数の専門家の方々に、ご参加いただき、まことにありがとうございます。関係者の一人として、心より御礼申し上げます。今日、一日にわたる活発な議論の展開を心待ちにしております。

「火宅」――三毒が燃えさかる世界

法華経譬喩品に、この現象世界の様相を「火宅」と表現し、そのような世界に仏が出現すると説かれています。

> 大慈大悲にして、常に懈倦無く、恒に善事を求めて、一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずること、衆生の生老病死、憂悲苦悩、愚癡暗蔽、三毒の火を度し、教化して阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが為めなり。(1)

「三界」とは、衆生の住む現象世界をさしています。そこには、生老病死に代表される苦悩が充満し、三毒（貪欲、瞋恚、愚痴）の火が燃えさかっているといいます。

No Image

仏は、「三界の火宅」に出現し、大慈悲でもって、三毒の火を消し、衆生の苦悩を救済するのが出現の目的、使命であるとするのであります。

貪欲とは、物質欲のみならず、権力欲、名誉欲への執着のエネルギーをさしており、これらの欲望にとらわれると、欲求不満のフラストレーションを引き起こしながら、際限なく増幅していく性質をもっています。他者を犠牲にし、収奪し、他者との相依相資の関係性のきずなを分断してまでも、自己の欲求をかなえようとするのが貪欲であり、その結果、自他共の破滅に追い込まれるのであります。

次に、瞋恚とは、自己中心性がかなえられないときに噴出する怨念、憎悪、恨み、嫉妬となり、そのエネルギーが高じてくると、「害」すなわち暴力となって噴出する攻撃性であります。暴力性もまた、他者との相

展示に合わせて開催された記念シンポジウムには、世界各国の学術者ら約350人が出席。会場正面には、ユネスコのエンブレムが

依相資のきずなを断ち切り、他者を憎み、傷つけながら、自他ともに破滅へと陥る煩悩であります。

そして、第三の愚痴は、無明と同意です。「無明」の「明」は、宇宙の「真理」に明るい智慧の光明をさしており、従って、無明はこの光明を覆い隠す、根源の煩悩であります。

釈尊はこの根本の煩悩である「無明」の闇を打ち破って、宇宙究極の「真理」を法（ダルマ）として覚知し、体現したのであります。このダルマにそなわる智慧が、縁起の法として表明され、仏の大慈悲の働きとなって、衆生救済へと向かい、ここに「人間共生」「文化・社会共生」「自然との共生」への道が示されたのです。そのような各次元に広がる「人類共生」の営為を、その根源から分断し、分裂させ、万物を混迷と苦悩の闇にとじこめる煩悩が、愚痴即ち無明であります。従って、「無明」こそ、瞋恚や貪欲や他の煩悩を引き出す根源の煩悩であり、根源的エゴイズムの当体といえるのです。

法華経では、この三毒をはじめとする煩悩が、個人の生命から激発されて、家族、民族、国家から人類へと広がり、この現象世界全体に充満していく様相を「火宅」と表現しております。

法華経方便品には、諸仏の出現する世界を「五濁悪世」[2]と表現し、中国の天台は、『法華文句』で「五濁の次第」[3]を説いております。現象世界の「濁り」の根本は、人間生命の中にある、「煩悩濁」と「見濁」であり、そこから「衆生濁」が生まれてきます。さらに、「命濁」となり、この四つの濁りが、次第に「劫濁」を形成するというのであります。

煩悩濁とは、貪・瞋・癡・慢・疑を指し、見濁とは、身見、辺見、邪見等の思想の乱れであります。即ち、偏見、差別、特定のイデオロギーへの執着や、それによる過激主義を指しております。

個人の生命が「煩悩濁」や「見濁」に侵されると、心身の調和を失って、抵抗力を無くし分裂していきます。ここに、「衆生濁」が形成されます。衆生の生命力が衰退すると身心の継続時間、つまり寿命が短縮化します。これが、「命濁」であります。今日では、現代科学、医学の長足の進歩によって、身心が支えられてはいま

すが、生命そのものの内包する生きるエネルギー、即ち生命力は衰退しております。その証拠の一つが、躁うつ病、統合失調症、各種の不安症、自殺の増加であります。

このように、煩悩・見から発した「濁り」は、衆生の生命をむしばみ、生命力を衰退させつづけ、その影響力を、個人の生命（心身）から、家族、民族、国家、人類へと拡大していきます。それぞれの段階の共同体（社会）や、そこに育まれてきた文化が、煩悩や悪見に侵されて、分裂し、混乱し、その内なる力を衰退させて滅亡に向かうのであります。個人から発した煩悩が、各共同体（社会）に浸透し、文化、文明を衰退させ、自然生態系とともに、人類がつくりだした「時代」そのものを分裂と混乱と破滅へと追い込むのであります。これを「劫濁」と表現したのです。

現代の世界は、長足に進歩する科学技術に支えられて一段とグローバル化を進め、人類社会はすでに「地球文明」の時代を形成しています。「暴力と戦争の世紀」といわれた二十世紀は、まさに、人類全体を巻き込んだ、「劫濁」の充満した時代相を呈していました。そして、二十一世紀に入っても、人類社会は、「劫濁」を脱してはいないのであります。

仏教流伝を支えた共生の志向性

今日、政治、経済、金融、人間精神の次元にまで浸透しゆく、三毒の病理現象を克服し、善心に輝く人間の連帯による、文明・社会の変革への道標を指し示すのが、現代における宗教の存在意義であると考えられます。

仏教は、釈尊の覚知した〝ダルマ〟に従う修行によって、四苦を生み出す三毒の煩悩を滅し、涅槃の境地から発する菩提に内包された善心を顕在化することによって、人間精神の蘇生、調和を原点として、社会、文化、文明への利他の実践を志す宗教なのであります。

インドでおこった仏教は、二千五百年にわたり、南アジアのスリランカ、東南アジアのタイ、ミャンマー方面、北方のシルクロード、東アジアの中国、韓・朝鮮半島、日本へと流伝し、また、チベット、ネパール

へと伝わり、全アジアを覆い尽くしています。仏教が流伝した地域には、古代からの多くの異文化、異文明が往来し、交流しておりました。つまり、仏教が遭遇したのは、異文明との出会いでありました。

仏教では、時と所に応じた弘教の方法として「随方毘尼」[4]が説かれています。それは、仏法の本義に違わない限り、各地方の風俗、習慣に従ってよいというものであります。仏教は、釈尊の悟った「真理」（法）を貫きながらも、流伝しゆく各地方の風俗、習慣等に従いつつ、民族、国家、文化、文明の違いを乗り越えて、やがてアジア全域の人々に受容されていったのであります。

仏教の流伝は、各種の仏典が、多くの言語に翻訳されるプロセスで、言語体系の違いからの教理の解釈や変容をもたらしています。また、他文化、他文明に内包された思想、哲学、道徳、習慣、宗教との出会いの中での相互浸透により、独自の仏像、仏画、文学、建築、庭園様式を生み出し、仏教文明の華を咲かせてきました。さらに、政治理念、福祉、医療への影響も引き起こしております。仏教と異民族、異文化、異文明との遭遇は、その差異から、当然のこととして、緊張と激しい葛藤をつくり出し、個人から、民族、国家の次元に及ぶ煩悩（三毒）を噴出させ、抵抗から、排斥、弾圧という、歴史的事態をも生み出しております。

しかし一方で、仏教の流伝は、相互の変容をこうむりつつも、共生・共存、調和・融合への道が模索され、それぞれの地域へと定着し、受容されていったのであります。仏教の流伝において、文化、民族、文明間の差異は、様々なストレスを生みながらも、基調としては、煩悩による断絶・分断ではなく、相互の善心の触発による共生・創造の志向性を秘めていたと考えられます。このような仏教のアジア全域へのグローバルな流伝、多様化のプロセスで、調和・共生、融合・創造への豊かな知恵と利他心（慈悲）が随所に開発されてきたのではないかと思われます。

今日、文字通り、地球全域に及ぶ、人類文明の「持続可能性」を考えるにあたり、仏教の二千五百年に及ぶ全アジアへの流伝、変容の経験のなかに、地球人類

の平和・共生の知恵と情熱（つまり、グローバルな慈悲の心）とモデルを学びとれるのではないかと思われます。各専門家による、本シンポジウムの開催の意義も、まさにこの点にあると考えられております。

法華経に包含された三つの思想

さて、多くの仏典の中でも、法華経は東アジアの民族に最も親しまれ、思想、文化、宗教、文明のあらゆる領域に多大の影響力を与えてきた仏典であります。その法華経の中にも、地球文明を平和・共生へと導く、貴重な智慧が示されております。法華経には、三つの大きな思想が包含されています。第一に「万人の成仏」の思想、第二に「永遠なる仏（久遠仏）」の思想、第三に「菩薩道の実践」であります。

「万人の成仏」の思想

第一の「万人の成仏」の思想については、まず、方便品でこの現象世界に仏が出現する目的が「一大事因縁」として示されています。所謂「開示悟入」の「四仏知見」[5]であります。ここに、仏知見は天台によれば仏性と同義であるとします。すべての人々の生命内奥から仏知見（仏性）を「開示」し「悟」らしめ、仏道に「入」らしめるのが、仏の出現の目的であるというのです。

この文から、法華経では、すべての人々が「仏性」を内在化し、しかも顕現できるところに、人権思想の根拠である「人間の尊厳」性を主張するのであります。その具体例として、二乗作仏、悪人成仏、女人成仏等が説かれております。つまり、人種、性別、職業、文化、民族、生まれ、宗教、そして心身の状態の差異にもかかわらず、すべての人々の生命に、「仏性」の内在を認めるところに、すべての人間の「平等」性を主張するのであります。

こうして、人間の心に巣くう煩悩――特に差別、偏見等の悪見を打ち破っていくのであります。それのみならず、いかなる人間も、「仏性」としての可能性を開顕し、その人独自の個性・特質を開示しうるのであります。「仏性」には豊かな善心即ち、慈悲、非暴力、智慧、

人類愛、勇気、信、希望、欲望のコントロールや能力、感性、生命力などが含まれております。その意味において、すべての人間が他者と「平等」に関わり、互いに尊敬しあうことができるのです。「万人の成仏」の思想は、全ての人々が差別、偏見を乗り越えて、「平等」に敬いあって「共生」する社会を指し示しております。ここに、「人間共生」の姿があります。

さらに、薬草喩品には、人類のみならず、万物が「共生」する調和社会のイメージが三草二木[6]の譬えとして示されております。三草二木として譬えられる個性豊かな草木が、天地の恵みをうけて栄える姿が、万物共生のイメージを描き上げています。このイメージに基づいて、仏の出現と衆生の関係性が語られていきます。[7]

仏の教えは大雲による雨のように、平等にすべての衆生に降り注いでいく。しかし、衆生は三草二木のように、その宗教的能力によって、様々な相違があるというのが、この譬えの本来の意味であります。

このように、三草二木は、草木の個性、特性をあらわしています。日蓮は、個性の特徴に応じての全面開花を「桜梅桃李[8]」と表現しています。この草木を人間個人とすると、すべての人々が、個性を開花する姿を示しております。次に、草木をそれぞれの民族が創造しゆく文化を指すと見れば、すべての多様な文化がそれぞれの特質をもちつつ、開花する姿となります。「桜梅桃李」とあるように、すべての文化が、それぞれの特質を十全に発揮しつつ、開花を競い合うのであります。自らの文化に誇りを持ちつつも、他の文化をも尊敬し、共にたたえあい、学び合うのが、「文化共生」の姿であります。ここに、「平和の文化」が現出するのであります。「人間共生」「文化共生」は、この三草二木の譬えにあるように、文字通り草木としての、自然生態系と「共生」しつつ、この大宇宙のなかでの「人類共生」の社会を築きあげていくのであります。

「永遠なる仏」の思想

第二に、「永遠なる仏」の思想は、如来寿量品で「久遠の釈尊[9]」として示されるもので、人類共生の宇宙論的基礎を形成しています。法華経では、「釈尊」に即し

て、その本地に「久遠の釈尊」即ち「久遠の仏」を洞察してくるのであります。五百塵点劫の譬喩によって、釈尊は、自分が成仏したのは、実質的には永遠の過去であると説く。そして、未来についても、成仏してから現在までの二倍であると説く。つまり、実質的には未来の寿命も永遠であることを示しております。「永遠なる仏」としての釈尊は、「永遠なる法」と一体であります。それ故に、「永遠なる釈尊」は「永遠の救済仏」であります。

釈尊は、永遠の過去に成仏して以来の活動を次のように示しております。

是れ自従り来、我れは常に此の娑婆世界に在って、説法教化す。(10)

釈尊は、成道以来、様々な方便を用いて、衆生を指導し、利益を与え、救済してきたのであり、その大慈悲の活動は、「未だ曽て暫くも廢」(11)したことが無いのであります。

法華経の会座では、このような「永遠の仏」のもとに、全宇宙の分身仏が菩薩等の眷族を率いて集合してくる場面が描かれていきます。ここに、「多様性の統一」の法理、つまり「多様なるもの」の「一なるもの」への収れんが示されます。そして、分身仏は、釈尊の寿量品をはじめとする説法を聴聞して、再び宇宙のそれぞれの場に帰っていくのであります。「一なるもの」から「多様なるもの」への展開であります。「永遠なる仏」「永遠なる法」のもとへ集合し、再び宇宙へと遍満していく。十方三世の諸仏（分身仏）、菩薩、衆生は、それぞれの役割を演じながら相互に関わり合い、全体としての「縁起」の網を織り上げていくのであります。

それは、まさにダイナミックな「縁起の曲」をかなでゆく、宇宙のシンフォニーであります。諸仏をはじめ、すべての存在は、独自の特性を発揮しながら、相依相資の関係性を通して、宇宙全体の「縁起」のシンフォニーに参画していく。これが、法華経の描く「世界観」であります。このような「宇宙観」「世界観」は、「人間共生」「文化・社会共生」「自然生態系との共生」

の基礎を成し、そして各次元の「共生」をダイナミックな調和に導く、「大宇宙との共生」への基盤となります。寿量品において、すべての人々の「仏性」は、「永遠なる仏」と一体の「永遠なる法」に基づいていることが示されたのであります。

「菩薩道の実践」

第三には「菩薩道の実践」であります。法華経では数多くの菩薩達が登場します。まず、地涌の菩薩は、釈尊の入滅の後に、法華経を広める菩薩として、従地涌出品から登場します。この菩薩については、「身は皆な金色にして、三十二相・無量の光明あり」[12]と記され、仏と同じくすばらしい姿として描かれております。

地涌の菩薩に四人の導師がおります。

> 是の菩薩衆の中に、四導師有り。一に上行と名づけ、二に無辺行と名づけ、三に浄行と名づけ、四に安立行と名づく。[13]

法師品には、法華経を受持し、広める者の使命として、「是の人は則ち如来の使にして、如来に遣わされて、如来の事を行ず」[14]と記されています。ここに、地涌の菩薩の存在意義が示されております。即ち、地涌の菩薩は、釈尊入滅後の「如来の使い」であり、如来から派遣されて、「如来の事」即ち、仏の民衆救済を引き継ぐのであります。

法華経では、地涌の菩薩の具体的行動のあり方を、釈尊の過去の修行の姿とされる不軽菩薩に見出すことができます。日蓮は、「一代の肝心は法華経・法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり、不軽菩薩の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」[15]と述べております。

不軽品において、増上慢の比丘が大勢力をもっていた時代に、一人の常不軽という名の菩薩が出現して、自分の出会う衆人を礼拝し、讃嘆していったといいます。「我れは深く汝等(なんだち)を敬い、敢て軽慢(きょうまん)せず。所以は何ん、汝等は皆な菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」[16]と。

しかし、何の資格もない不軽菩薩の授記に対して、衆人は「我れ等は是の如き虚妄の授記を用いず」といって悪口罵詈し、杖木、瓦石をもって打とうとしました。不軽菩薩は、それを避けながらも、「我れは敢えて汝等を軽んぜず。汝等は皆な当に作仏すべし」と唱えたというのであります。そして、不軽菩薩は、臨終の時に、威音王仏が涅槃に入る前に説いた「法華経」の偈が虚空から聞こえるのを聞いて、六根清浄となり、寿命をのばしたといわれています。増上慢の衆人も、その姿を見て、不軽菩薩を信じ、法を聞いたというのであります。

このように不軽菩薩の修行は、人々の「仏性」と、そこに内包された善心を開発するために、非暴力と対話に徹しているのであります。不軽菩薩は、いかなる場合でも、相手の「仏性」を信じ、非暴力と対話、善心で応えていったのであります。今日的には、非暴力による反英植民地運動を繰り広げた、マハトマ・ガンジーや、その流れをくむマーティン・ルーサー・キング牧師、ネルソン・マンデラの実践と、軌を一にしております。

法華経の菩薩道の実践例としては、薬王菩薩は、「三界の火宅」の中で、「病気からの自由」を担い、今日的には食糧、水、医療、保健等の基本的ニーズを保証し、健康で長寿を願う民衆の権利を表示しています。妙音菩薩は、「音楽」に象徴される「芸術表現の自由」を表示し、芸術の創造の働きをあらわしています。普賢菩薩や文殊菩薩は、「学問・思想の自由」を掲げ、学術、科学、思想への創造的働きを示しています。

そして、民衆の切なる願い、「現世利益的」な要望に耳を傾け、その願いに応じつつ、何物をも恐れない境地を与えゆく菩薩—施無畏者—が観世音菩薩であります。この菩薩の行動により、現実社会における民衆の切なる願いをかなえることが、今日でいう「人間の安全保障」の内実をつくりあげているのであります。例えば、「暴力からの自由」「政治権力からの自由」「自然災害の恐怖からの自由」「毒薬の恐怖からの自由」等であります。

菩薩に見る「世界市民」像

以上のような、法華経に登場する菩薩群像は、「人間共生」「文化・社会共生」「自然生態系との共生」を成し遂げ、「人類共生の社会」を具体的につくりゆく、人間群像であります。今日的表現では、二十一世紀を担いゆく、「世界市民」のそなえるべき条件を指し示していると思われます。

そこで次に、今日の「地球文明」を平和、共生に導く「世界市民」の条件を、法華経に登場する菩薩群像から抽出しておきたいのであります。

第一に、世界市民には、人間の尊厳、生命の尊厳を可能にする生命観が要請されます。しかも、その生命観は、壮大なコスモロジーに支えられていなければならないのです。法華経には「虚空会の儀式」として壮大な宇宙論が展開し、寿量品には、五百塵点劫の譬喩によって示される永遠無限のコスモロジーの究極に「久遠の仏」が開示されております。「久遠の仏」は、「永遠なる法」と一体であり、宇宙生命そのものを当体とする「永遠なる救済仏」であります。

第二に、「永遠なる救済仏」を基盤として、方便品の「万人の成仏」が成立してきます。世界市民の「人間の尊厳」はすべての人々が、平等に人種、性別、民族、文化、宗教、生まれに関わりなく「仏性」をそなえ、しかも、それを顕在化しうる「万人の成仏」観に具現化されております。それは、あらゆる差別観、偏見を克服し、慈悲、智慧、欲望のコントロール等の善心を顕在化させる原動力であります。

第三に、地涌の菩薩に、釈尊滅後の「如来使」としての使命が託されていますが、今日の世界市民の使命は、人類に平和と幸福をもたらす、持続可能な「地球文明」の創出に寄与することであります。

第四に、不軽菩薩の修行に示されたように、世界市民の行動規範は、「非暴力」であります。平和共生の創出の手段として、暴力を用いず、適切なる非暴力の手段を、智慧と慈悲によって、創出することであります。例えば、対話、交流、参画、教育、文化、意識啓蒙等であります。

第五に、薬草喩品に示される、三草二木のイメージ

を「平和の文化」として、具現化することであります。大自然との共生を基盤として、「多即一」「一即多」を実現する「多文化共生」「平和の文化」観をもつことであります。それぞれの個性を開花し、能力を強化しながら、そのダイナミックな調和の中に、共生の統一性が保たれるような、「多文化共生」の平和社会を築くために、それぞれの立場で貢献することであります。

第六に、世界市民の自己実現は自らのエゴイズムを克服し、利他主義に生き、人類の平和に貢献することの中に、成就するのであります。つまり、自他共の幸福（安寧）を目指すことであります。

第七に、世界市民の菩薩的「自己」の形成は、「大我」（上行菩薩の「我」）に基盤を置きつつ、「多様性と統一性」の調和に生きる「自己」を目指しています。法華経の菩薩群像は、衆生救済のために、対象に応じて、さまざまな分野に応現しています。例えば、妙音菩薩は三十四身、観音菩薩は三十三身を体現すると説かれています。

第八に、世界市民の菩薩的「自己」は、それぞれの分野、即ち「現場性」「地域性」に根差しつつ、地球人類への貢献というグローバルな視野を持ち、行動しなければならないのです。

第九に、世界市民の菩薩的「自己」は、「エスニックな自己」「国民としての自己」「『地球人』としての自己」等が、重層的に、ダイナミックに調和統一している自己であります。そのような自己が、「現場性」「地域性」での経験を積みつつ、その生活の場、思考の場を拡大し、グローバル化しつつ、人類救済、人類への貢献という誓願をかなえていくのであります。

第十に、世界市民が今日において、具体的に挑戦するのは、人類的課題であります。「三界の火宅」の内実たる地球的問題群―紛争、テロリズム、核兵器、大量破壊兵器、グローバル・マモニズム、「構造的暴力」の引き起こす各種の格差、人権抑圧、難民、生命倫理の課題―への挑戦です。その挑戦において、世界市民は、「文明間対話」「宗教間対話」を進め、善心の連帯を「縁起の綱」のごとく広げゆくことであります。「文明間・宗教間対話」や協働を通して、自己の属する文明、文

化や宗教への造詣を深めるとともに、人類の悠久の歴史が創り出してきた世界のすべての精神的遺産に敬意を払い、知恵を学びあっていくのであります。そして、そのような「対話」の焦点は、あくまで、ともに、人類的課題を克服し、人類共生の文明を築きあげていくことであります。いかなる宗教にとっても、人類の平和共存、地球生態系との共生以上の喫緊の課題はありえないからであります。

さて、この三大思想をはじめとする法華経の思想、真理も他の仏典と同じく、東アジアの諸民族、文化、文明へと流伝され、その邂逅を通じて、ある場合は変容をこうむりながらも、全体的に、また部分的に受容されていったのであります。そして、法華経の流伝は基本的には、差異を差別化し、分裂をもたらすのではなく、善心による差異を生かしつつ、それぞれの文化、思想、宗教、文明の更なる創造、展開を引き起こしてきたのであります。その領域は、法華経の写本、各言語への翻訳から、思想、宗教、倫理、道徳、習慣、儀式、文学、芸術、建築、政治、福祉に至る、相互触発にまで及んでおります。このような、グローバルに流伝した法華経をはじめとする、諸経典の、受容、変容、共創のプロセスのなかに、二十一世紀の「人類共生」と、持続可能な「地球文明」への知恵とモデルと、そして、主体者となる世界市民の実像が浮かび上がるのではないかと考えております。

最後に、本シンポジウムにおけるそれぞれの分野の専門家によって、法華経を含む仏教経典とその歴史的変遷の中で、醸成された豊かな知恵が、次々と開示されることを楽しみにしております。

注

（1）『妙法蓮華経並開結』、創価学会版、一七二頁。

（2）同書、一二四頁。「諸仏は五濁悪世に出でたまう。所謂る劫濁・煩悩濁・衆生濁・見濁・命濁、是の如し。」

（3）『法華文句』巻四巻下、『大正大蔵経』第三十四巻、五三頁。「次第は煩悩と見とを根本となす。この二濁より衆生を成す。衆生より連持の命有り。此の四、時を経るを謂て劫濁と為すなり。」

（4）『新版　仏教哲学大辞典』、創価学会版、一〇八六－七頁。

（5）『妙法蓮華経並開結』、一二一頁。「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得しめんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したまう。」

（6）同書、二四一－二頁。「迦葉よ。譬えば三千大千世界の山川・谿谷・土地に生ずる所の卉木・叢林、及び諸の薬草の如し。種類は若干にして、名色は各おの異なり。密雲は弥く布き、遍く三千大千世界を覆い、一時に等しく澍ぐ。……諸の樹の大小は、上中下に随って、各おの受くる所有り。一雲の雨らす所なるも、其の種性に称いて、生長することを得、華菓は敷き実る。」

（7）同書、二四二頁。「一地の生ずる所、一雨の潤す所なりと雖も、諸の草木に各おの差別有り。迦葉よ。当に知るべし、如来も亦復た是の如し。世に出現すること、大雲の起こるが如く、大音声を以て普く世界の天・人・阿修羅に遍ぜること、彼の大雲の遍く三千大千国土を覆うが如し。」

（8）『日蓮大聖人御書全集』、七八四頁。

（9）『妙法蓮華経並開結』、四七七－八頁。「一切世間の天・人、及び阿修羅は、皆な今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり。然るに善男子よ。我れは実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり。」

（10）同書、四七九頁。

（11）同書、四八二頁。

（12）同書、四五二頁。

（13）同書、四五五頁。

（14）同書、三五七頁。

（15）『日蓮大聖人御書全集』、一一七四頁。

（16）『妙法蓮華経並開結』、創価学会版、五五七頁。

（かわだ　よういち／東洋哲学研究所所長〈当時〉。現在、顧問）